

カトリック 仙台教区報

2015年1月4日

No.221

発行

カトリック仙台司教区

〒980-0014

仙台市青葉区本町 1-2-12

Tel(022)222-7371 Fax(022)222-7378

発行責任 広報委員会

URL <http://sendai.catholic.jp/>

主のご降誕と新年のお喜びを申し上げます

2015年 司教年頭書簡

わたしたちが抱く信仰による希望

司教 マルチノ 平賀 徹夫

仙台教区の皆さま、2015年の新しい年を迎えました。この一年を通して、共にいてくださる主キリストの恵みと父である神からの祝福が、皆さまの上に豊かに注がれますよう心から祈りながらこの書簡をお送りいたします。

1

さて、今年の書簡でわたくしは、「わたしたちキリスト信者の抱いている希望」について考えてみることを呼びかけようと思いました。わたしたちは信仰による希望を恵みとしていただいているわけですが、それがわたしたち自身にとってどれだけの喜びとなっているのか、そして、この希望に力づけられて生きているはずのわたしたち共同体のありよう（教会の雰囲気など）が、周りの方たちにも生きる力の元として伝わるものとなっているかを見てみる



ことが、信仰のあかしのための第一歩だろうと思います。地区制度が始まったいま、地区の中で特にこの「信仰による希望」を皆で共有できたらずばらしいと思うのです。

使徒聖パウロは『ローマの信

2

て希望に満ちあふれさせてくださるように（15・13）」と書いています。これは、神は希望の神であり、希望を与えてくださる方、わたしたちが持つことのできる希望の最終的・絶対的な根拠であって、聖霊によってわたしたちを希望にあふれたものとしてくださる、という信頼と確信の祈りではないでしょうか。

3

前教皇ベネディクト16世は回勅『希望による救い』で、『希望』は、聖書における信仰にと

4

つて中心的な意味をもつことばです。いくつかの箇所では『信仰』ということばと『希望』ということばを置き換えることができるように思われるほどです。…信頼できる希望のたまものを与えられたことが、初期キリスト信者の意識を決定的に形づくりしました。…キリスト信者は、将来自分たちを待ち受けていることを正確に知っていたわけではありませんでした。けれども彼らはいかなる人生も無で終わるのでないことを知っていたのです。…キリスト教は単なる『よい知らせ』ではありません。すなわち、単にこれまでに知られていなかった内容を伝えることではありません。…福音はあることを引き起こし、生活を変えるような伝達行為なのです。…希望を持つ人は、生き方が変わります。新しいいのちのたまものを与えられるからです（2項）」と教え、次いで「キリスト教信仰は現代のわたしたちにとっても、希望であり、生活を造り変え、支えることができるでしょうか。…それともそれは単なる『情報』にすぎないものとなっているでしょうか」と、わたしたちに問いかけています（10項）。

また、『ペトロの第一の手紙』には、「心の中でキリストを主とあがめなさい。あなたがたの抱いている希望について説明を要求する人には、いつでも弁明できるように備えていなさい（3・15）」と

生命の泉

「ご降誕が真夜中の出来事だったというのは象徴的な意味を持っていたと思われる。真夜中には人の秘めた思いが密かに実行される。『目を覚ましていよ』と荒野に叫ぶ者の声が聞こえる▼慰安婦報道問題に端を発した朝日バッシングは対抗する各マスメディアの旗色を鮮明にし、議論を深めるどころか抹殺しようとする▼中学校の歴史教科書から自虐史観として『慰安婦』の記述は削除されてしまった。この運動の事務局長として中心で支えたのは他ならぬ安倍首相だった。慰安婦の強制連行はなかったとか、業者がしたこと政府の関与はなかったとか、戦争時にはどの民族もしたことだなどと言いつつ誤魔化し。これらのことを認めることは、わが民族を貶めおとしめることになるのだろうか。戦争はどんな人をも狂気にする。人間らしい品性を失わせるものだということに他ならない。だから戦争をしてはならない、というのが歴史から学ぶことではないか▼日本の社会はとても簡単に国家と自分を同一視する。『個人』というものを一度も自分の意志で生きたことがないから国家が最後のよりどころになってしまふ」（辛淑玉（シンソゴ））▼昨年は格差社会のひずみが若年層を直撃した年だった。また、家庭の崩壊と非婚率の増加、規制緩和に伴う競争の激化。それに伴う犯罪の急増など「お金」をすべての尺度とすることに端を発している。この価値基準は世界の国々に及ぶ。輸出によってますます飽くなき豊かさを追求しようとする国々、輸入によって豊かさのおこぼれに与ろうとする貧しい国々。お金の魔力に逆らうことは容易ではない。

(守)



第二バチカン公会議公文書とわたしたち

司教 平賀徹夫

第二バチカン公会議は1962年から1965年にかけて開催され、16の公会議公文書を採択しました。4つの憲章、9つの教令、3つの宣言です。憲章とは憲法のような根本的な大方針、大原則で一番重要なもの、教令は教会が内部の刷新を行うための教えで、具体的な教会内の改革を目指しており、宣言は教会が教会外の人々に向かって自分の態度、考えを示すものです（松本三朗著『神の国をめざして』19ページ）。同書の21ページに、この16公文書全体を一本の樹にたとえたきれいな図があり、「現代の教会の行くべき道をさし示す神の導きとして理解すべきでしょう」との説明があります。『現代世界憲章』の第2項に、「この第二バチカン公会議は……全人類に話しかけ、現代世界における教会のあり方と取り組みについてどのように考えているかをすべての人々に明らかにしたいと思う」とある通りです。

この公文書は公会議直後から分冊の形で日本語に訳されてきました。その後、南山大学監修で中央出版社から『公会議公文書全集』が発行され、そして2013年9月29日、『第二バチカン公会議公文書 改定公式訳』がカトリック中央協議会から出版されました。この改定公式訳は大冊なので、特に4憲章についてはたやすく手にとって読めるようにと、2014年2月末日、分冊でも発行されました。日本の司教団は特にこの4憲章を読むことを勧めています。仙台教区でも、どのような形であれ、機会を作って、皆さんに読んでいただけたら良いと思っています。

『教会憲章』はこのように始まります。「諸民族の光はキリストであり、そのため聖霊において参集したこの聖なる教会会議は、すべての被造物に福音を告げ、教会の面（おもて）に輝くキリストの光をもってすべての人を照らそうと切に望む…。『現代世界憲章』はこうです。「現代の人々の喜びと希望、苦悩と不安、とくに貧しい人々とすべての苦しんでいる人々のものは、キリストの弟子たちの喜びと希望、苦悩と不安でもある。真に人間的なことがらで、キリストの弟子たちの心に響かないものは何もない。なぜなら…。」どうです、読みたくなってきましたか？

あります。

信仰によってわたしたちは、どのような希望を、どのようなことを根拠として抱いているでしょうか。そしてどのようにしたならば、わたしたちが「希望を抱いている者」であることを、だれかが気づいてくれ、尋ねてくれるようになるのでしょうか。

5

ところで、2011年3月11日の東日本大震災から4年目となります。被災された方々の支援

のためわたしたちは、「仙台教区サポートセンターを通しての支援活動」と、「4・6、45計画」を展開してきました。いまは、その第3期として続けられています。カリタスジャパンはじめ教区内外の皆さまの熱いご支援・ご協力、日本中からの大勢のボランティアさんの並々ならぬ熱意をいただけてやってこられたことです。被災地域にある小教区の皆さんは、ご自分も被災しておられながらも、本当によく頑張つてきま

した。有難うございます。被災地の復興は当初の予定よりだいぶ遅れているとわかりますが、それでも仮設住宅から復興住宅へ移り住む段階へと進むにつれ、新しい問題や懸念が次々と起こっているのが聞こえてきます。被災の苦しい状況下にある方々はまだたくさんおられます。このような状況は今後も続くでしょう。わたしたちの支援活動が信仰による希望に裏付けられ、そこからあふれ出る実りの現れであつたなら

素晴らしいと思います。

これからどうかよろしくお願いいたします。ベネディクト16世は「大事なのは、つねに希望し続けられるということを知ることです。…わたしたちは偉大な希望に基づいて確信します。…このような希望のみが、どのようなときも、行動し、道を歩み続ける勇氣を与えてくれます（35項）。」とし、「キリスト

結び

新しい年、2015年がスタートしました。今年もいろいろなことが起きるでしょうが、弟子たちと共に心を合わせて熱心に祈っていた（使徒言行録1・14）聖母が、希望の星として（50項）、罪深いわたしたちではありませんけれども、希望の使徒となつて父である神のお望みを果たすことができるようにいつも祈ってください。父であることを願いながら、この一年を父である神にささげたいと思います。

2015年1月1日



東仙台教会の馬小屋

司教日程

1月・2月

- 1・13 司教団・役員会 司教団・役員会
- 15 司教団責任役員会
- 18 仙台教区司教団月例会
- 19 仙台教区司教団月例会
- 20 仙台教区司教団月例会
- 22 仙台教区司教団月例会
- 26 仙台教区司教団月例会
- 27 仙台教区司教団月例会
- 29 仙台教区司教団月例会
- 30 仙台教区司教団月例会
- 31 仙台教区司教団月例会
- 1 仙台教区司教団月例会
- 2 仙台教区司教団月例会
- 3 仙台教区司教団月例会
- 4 仙台教区司教団月例会
- 5 仙台教区司教団月例会
- 6 仙台教区司教団月例会
- 7 仙台教区司教団月例会
- 8 仙台教区司教団月例会
- 9 仙台教区司教団月例会
- 10 仙台教区司教団月例会
- 11 仙台教区司教団月例会
- 12 仙台教区司教団月例会
- 13 仙台教区司教団月例会
- 14 仙台教区司教団月例会
- 15 仙台教区司教団月例会
- 16 仙台教区司教団月例会
- 17 仙台教区司教団月例会
- 18 仙台教区司教団月例会
- 19 仙台教区司教団月例会
- 20 仙台教区司教団月例会
- 21 仙台教区司教団月例会
- 22 仙台教区司教団月例会
- 23 仙台教区司教団月例会
- 24 仙台教区司教団月例会
- 25 仙台教区司教団月例会
- 26 仙台教区司教団月例会
- 27 仙台教区司教団月例会
- 28 仙台教区司教団月例会
- 29 仙台教区司教団月例会
- 30 仙台教区司教団月例会
- 31 仙台教区司教団月例会

地域と共に生きる

大船渡教会献堂60周年

昨年の12月7日(日)カトリック大船渡教会は献堂60周年を迎え、平賀徹夫司教により記念のミサが行われました。

大船渡教会の献堂は1954年(昭和29年)12月6日のこと。参列者の集合写真を見ると、小林有方司教やスイスのベトレヘム会ガイスル神父を囲んで100人ほどの信者が写っています。後に教会の屋根の鐘楼にはスイスから送られてきた鐘がつけられ、大船渡の街に鳴り響くようになりました。こうしていつしか60年の月日が流れたのです。

大船渡教会が建てられた丘は当時「コヒドロ山」と呼ばれ、まわりは田んぼに囲まれた人気のない



献堂式の集合写真 1954・12・6

小高い丘でした。この丘は頑丈な岩盤でできていて、しかも、大船渡市のどこから来

やすく便利な場所です。教会が建てられた後、周りには家屋がどんどん建ち今では大船渡市の中心に位置する絶好の場所になっています。山浦玄嗣さんの亡きご母堂山浦金子(きんこ)さんが一所懸命になって見つけた土地だと聞いていますが、先見の明があったの



献堂60周年記念写真 2014・12・7

だと思っています。

私たちはこの60年の間で2度の津波を経験しました。昭和35年のチリ地震津波と、平成23年の東日本大震災です。この2度の津波とも波は教会のすぐ足下まで来ましたが、幸い建物は被害を受けなかったが、教会は地域の復旧のために懸命に働きました。カトリック教会はこうして大船渡市民の中に自然に溶け込み受け入れら

れてきたのです。

今回の震災を機に大船渡教会には、フイリピンのお嫁さんやその子どもたちがたくさん集まって来るようになりました。そして「先住民」の気仙人と一緒になって教会を運営する200人の大所帯になっています。私たちはこれから「いつも明るく、いきいきピチピチ」と、地域とともに生きる教会でありたいと思っています。

(大船渡教会 熊谷雅也)

仙台教区「新しい創造」…第3期の取り組み



ネギの収穫作業

「今日もよろしくね!」

災害ボランティアセンターとしては、宮城県では南三陸が最後の災ボラとなりました。そのボラセンと共に、これまで私たちカリタス米川ベースは仮設支援だけでなく、瓦礫撤去や漁業支援、農業支援など様々な活動を行ってきました。屋外活動がとて多い事が自他ともに認める米川ベ

スの特徴であると思います。



仮設でのお茶っこ風景

浜での作業も、農地での作業も、一度行つて作業を覚えてしまえば、次の機会には「ベテランさん」と呼ばれます。私たちが活動している中で、最も聞く言葉の一つが冒頭の言葉を含めた「今日も」。今日も頑張ろうね、今日もよろしくね、今日もありがとうね。

共に汗を流し、働く中で、普段は聞くことのできないお話を地元の方々としたら、それによって人との繋がりが深まっていくことを実感する事が出来ます。それはもしかしたらお茶っこ(仮設支援)だけでは繋がるのが難しかったものであるかもしれません。

仮設に行つても、「昨日ネギの出荷のおでつて(お手伝い)してきましたよ」「ホタテの耳釣り作業してきました」といったことを話すことで、おばあちゃん達の若い時の話や、地元の浜話を楽しそうにして下さいます。町の方々が経験



ホタテの耳釣り作業

してきたものの一部を私たちも同じように体験させて頂けているという事はとても嬉しい事です。そして、仮設でお年寄り方に教えて頂いた事を、また活動の中で地元の若い漁師さんなどと話すと「そんな話も知ってるの?」と、とても面白がって下さいます。

仙台教区サポートセンターでは、2015年復興支援カレンダーを発行しました。1部300円以上の寄付を呼びかけています。注文は5部から、メールかFAXで申し込んでください。問い合わせ 022-797-6643

町の中を行ったり来たりする私たちのような人間だからこそ、町の中にかける橋がきつとあるのではないかな。そう思いながら活動を続けさせて頂いております。私たちは、今日も、そんな寄り添いを町のどこかで続けています。(カリタス米川ベース 荒川直人)

2014年度 教区研修会 集会祭儀とは？

仙台教区宣教師司牧評議会が主催する教区研修会は、講師を森田直樹神父にお願いし、各地区(1)と(2)地区合同)に実施している。

第七・第八地区・教区研修会

「よほどのことがない限り…。」

11月24日(月) 午後1時から3時30分まで郡山教会聖堂で行わ



れた写真。

森田神父の講話が始まってほどなく、「司祭不在の主日の集会祭儀を行っている教会は？」との森田神父の問いかけに、「月に一度定期的に。会津若松教会です。」と答えた私の意識の中に、集会祭儀が自分の教会では定着していることへの自負に似た思いを感じていた。しかし、神父様の講話が進むにつれて、その自負が徐々に壊さ

れてゆくのであった。集会祭儀は「ミサを求めるもの」であり「ミサの行われている教会の、そのミサと一緒にささげるもの」ということが基本である。そして、「隣の教会でミサが行われているのであれば、そのミサに出る。」とのこと

葉に、隣の教会までの距離のこともあるなあと、つまらない考えが浮かんできた。しかし、実際に自分の地区にあてはめてみると、「会津若松教会にとって、最も近い隣の喜多方教会までは22キロ離れているが、これは隣の教会だろうか。」という戸惑いのうちに、「隣の教会のミサへの、我が教会からの参加者の数よりも、我が教会の集会祭儀への参加者の数ははるかに多い。」という実情に、地域の信徒が集まって祈り、御聖体を拝領することは、ミサへの絶対的な信頼がある限り、尊いことだと思う。ただ、この研修では、森田神父様のお話から「よほどのことがない限り集会祭儀は行わない」という印象が残っている中で、この印象を常に心がけながら、隣の教会のミサと心をひとつにして、集会祭儀にあずかることをたいせつにしたい。朗読奉仕の仕方についても、神父様は「実演」を盛んに取り入れながら指導くださった。こちらは、ある程度は出てしまう「個人差への指針を与えていただいた」ということで、有益な研修となった。

いつも様々な気づきを与えてくださっている教区研修会に、今回も感謝の一念である。

(会津若松教会 佐藤 大)

第23回仙台ロゴス講演会

「みんな神の子どもだから」
——どうして差別が生まれるのか——

講師 平賀徹夫司教

2014年10月26日(日)、仙台ロゴス研究所主催による講演会が北仙台教会信徒会館で行われ、42名が参加した写真。

平賀司教は日本カトリック司教協議会「日本カトリック部落差別人権委員会」委員長と「子どもと女性の権利擁護のためのデスク」の担当司教として活動されていることから、各委員会の役割と活動状況や現状について具体的に平易に話された。

日本の社会・日本人の中には、表に現われ



ず秘やかに深く潜んでいる根深い偏見や差別意識があり、人が人として認められない現状がある。被差別部落の地域的な差別、生まれながらの被差別部落出身者であるが故の差別、身分の差別、結婚の差別、根深い血縁・血筋偏重、ハンセン病者への偏見と差別等々。これらが一般の人々のみならずメディア・マスコミや警察、検察などでも偏見や人権無視が

行われ、国家権力が縛り付けている現状があり、種々の冤罪事件へと結びついている。自白偏重の捜査、検察側の有利なものみの証拠提示、証拠の未開示、長期間の拘束等々。狭山事件、袴田事件等々多くの事件が解決されないままとなっている現状を話された。

「日本カトリック正義と平和協議会」の活動も日本のカトリック教会の中で評判がぱっとしない、参加者が多くない。なぜかと言うと「人権」という言葉の響きが教会あるいは宗教からすると何か

取っ付き難いという面があるようだ。教会が社会問題、政治問題を扱うことを憂慮する会というグループがあり、抗議されることもある。カトリック教会の中にもなぜ社会問題を扱うのか？という疑問もある。

差別意識は福音の教えに反すること。人権擁護の観点からも、これら社会問題に対して教会は声を上げ社会に働きかけて行く。社会の中で生きている教会として、より社会問題に取り組んでいる。「現代世界憲章第76項」に、教会は何時何処においても真の自由をもつて信仰を説き、社会に関する自らの教えを伝え人々の間において自らの任務を妨げられ

ることなく遂行する権利を持っている、人間の基本的権利や霊魂の救いのために必要とあれば、教会は政治的秩序に関わる事柄についても道徳的判断を下すことができる。この表現がほとんどそっくり「カトリック法典第747条第2項」にも使われている。

「人が人を大切にすること」というイエスの教えを実際に生きていく時に、信仰の目から見てそれでよいのかと現実を見ていく必要がある。

教皇フランシスコは使徒的勧告「信仰の喜び」の中で、阻害されている人々に対して責任を持って生きていくこと、これこそが教会で大事にされるべきであるとメッセージを發している。

質疑応答で、人は差別になぜ傾きやすいのか？等々の問いに、パウロの書簡からガラテヤの信徒への手紙3章26、2、ローマの信徒への手紙12章15、16を引用しながら、キリスト者としてイエスの教えを生きていくことの大切さを訴えている。さらに他者の苦しみには「はらわたする」(他者に対するはらわたが揺さぶられよじれ苦しくなるほどの同情や共感をもつ事)共感する事を意識して行わないと身に付かない。自発的に自覚的に選り取って意識していかないと神の子として生きていく事にならない。私たちは信仰を保ちつつもイエスにつながっていないかもしれない。

(豊厚教会 山田 務)

正平協全国集会福岡大会 参加報告(2)

現地学習「水俣に学ぶ」

東日本大震災と福島原発事故以来、水俣病事件と被災地福島が重なるとの参加案内書が目にとまりました。案の定、定員20名の枠に45名の参加でした。

博多駅からJRで熊本県新水俣駅下車、世界の30%の生産を誇るチッソ水俣製造所の広大な敷地周辺を巡り、水俣病センター・相恩社に到着。不知火湾の豊かな海でしか生活を営むことが出来なかった住民の苦しみを伝えていただきまし

た。1945年、日本窒素肥料株式会社の水俣工場を設立。1953年後の水俣病患者1号発症。この時期、漁民とその家族に精神症状、運動マヒ、廃人となり死亡する方が続出。奇病として隔離。1961年、初めて胎児性水俣病認定。1968年、政府が「熊本水俣病の原因はチッソ水俣工場のメチル



水俣病歴史考証館(相恩社)

水銀化合物」と認定。昭和重工の新潟水俣病とともに公害病と認定した。

公式認定から58年経過し、語り部の杉本氏は、40年の月日が必要とした胸の内を話された。彼が12

歳で網元であった両親、祖父母が奇病の名のもとに隔離病棟に収容された。第3人を抱えての日常生活が長男である杉本氏に背負わされた。病気が移るということ、近所・親戚・仲間すべてが彼の前から離れ去った。今、両手先の感覚にマヒがあることは、自覚できずにいたが、最近医者の診断により、胎児性水俣病と判明。淡々と話されておられるのですが、涙を止めることが出来ませんでした。

水俣という地名が病名になる。患者でない地域の人たち、患者になった人の様々な亀裂で、二重の苦しみに、偏見と無理解が重なる。国の重い腰は、住民に不利益をもたらした。経済優先の国策は、大企業チッソを保護する。特別措置法による救済を求める人が6万3000人ともいわれている。また、「ふくしま」の名もと原発の被災者でありながら、いかほどの苦

難を味わっておられるか。ここでも、国は電力という大企業を保護し、福島住民の生活・いのちが奪われたままになっている。「因果

関係が判明しない」とのこと。58年前と全く同じである。

使い捨てが、何の不思議もなく出来ている時代。物作りには、全てエネルギーを必要とする。日用雑貨に至るまで、チッソの原料なくして製品に至らない。

自らの生活を見直さなければ、「神はこれを見て、良しとされた」《創世記1》の言葉は、天・地上・海・水をとらえて、私たちに何を諭されたのでしょうか。今は、豊かな海を望みながら、不知火湾の水銀汚泥埋立地にあるエコパーク慰霊碑前で祈りをささげ、ゆるしを願った。(正平協 芳賀ヒロ子)

玄海原発を訪れて

第38回正義と平和全国集会「2014福岡大会」に参加しました。10にも及ぶ分科会と6つの現地学習会は、いずれも古くて新しい課題をはらんだものばかりでした。

私は、福島第一原子力発電所の水素爆発事故後も、世間で流れるニュースほどには復興も、除染も不安も進展・解消されているとは思えないこの地域に住んでいることから、現地学習の「玄海原発を巡る」に参加してきました。

九州

第一の都市、福岡をバスで出



原子炉実物台模型

オリンピックや選挙にうつつを抜かし、焦点をぼかされないように気を引き締めなければいけないのだと、痛感しています。

(原町教会 勝治 美喜子)



玄海原発全景

賀県にある玄海原発を目指しました。市街地を抜けて緑がだんだん多くなり、美しい虹の松原を見ながら、その先にある玄海原発はどこなところにあるのかと想像をめぐらしておりました。原発立地地域ならどこにでもあるエネルギーパークでの説明は、「どうだ！すごいでしょう」といwnばかりに、炉心の模型を展示し、玄海原発は安全で未来は明るいといわんばかりの宣伝です。

原発の誘致時代以来、長く粘り強く闘ってきた仲秋喜道(なかあききどう)さんたちの運動は、再稼働をもくろむ九州電力の動き、および政府の動きに楔を打とうとしています。

福島の爆発事故が地震や津波だけでなく、40年という耐用年数を超えて無理に動かしてきた帰結であったことは、いつの間にかうやむやにされてしまっているのです。悔しさと怒りだけが残ります。

病障連研修会

あなたは、必ず救われる
すべての人が抱えている
心の闇を払われた

毎年開催されているカトリック仙台教区病障連の研修会は、今年も11月1日(土)、四ツ家教会で行われ、126名が参加した。



講師に晴佐久昌英神父(東京教区・多摩教会)を招き、表題のテーマで講演していただいた「写真」。

師は、「あらゆる苦しみには意味があり、それは喜びにかわるものだ。大切な人を亡くして悲しんでいるなら、死はまことの誕生、全ての人の命は永遠であり、必ず天国での再会はある。神は愛であり全ての人の救いを望まれている。現代の聖人と呼ばれているマザーテレサも皆さんと同じように心の闇を抱えておられた。私たちが闇を抱えないわけがない。『あなたは、必ず救われる』の確信から、全ての人が抱えている闇は払われる」と、話された。

講演前に、日々の苦勞を打ち明け、暗い気持ちで会場に入った方も、講演後に歓喜の涙で、「今日は私のための日でした。私の心の闇を洗い流していただきました」と、喜びを語っていた。

私たちの会も、「小さな福音宣教の会」であることを再認識して今後の活動にあたっていきたいと思う。

(釜石教会 小野寺 哲)

特別養護老人ホーム

「暁星園」落成式

11月19日(水)、特別養護老人ホーム「暁星園」の落成式が行われた。

式には、平賀徹夫司教、仙台市健康福祉局長、仙台市老人福祉施設協議会会長ら来賓をはじめ、工事関係者、老人福祉施設関係者、カトリック児童福祉会の関係者ら170人ほどが参加した。

挨拶に立った、園長 菊地昭三氏は、「今年で暁星園開設39年目にあたる。一貫して一人ひとりを大切にする基本理念のもとに運営されている。新しい

環境の中でも、人と人との心のつながりを大切にしたい」と抱負を語った。

祝辞として、仙台市健康福祉局長 高橋宮人氏は、「地域に希望をもたらし施設として発展することを期待する」と、仙台市長の祝辞を代読した。

また、平賀司教は、「聖書の」とばに、『持つているものは、さらに豊かにあたえられる』とあるが、さらに豊かになるように、神さまからの恵みが与えられるように」と励ました。

式典の中で、設計、施工に携わった各社に感謝状と、記念品としてマリア像が贈られた。

式典の後、祝賀会が行われた。12月からは、旧施設の入居者が移転し、さらに新たな入居者を決定して来年4月からはフル稼働する予定。



新「暁星園」は、全室個室で、入居者のプライバシーを大切にしながら、10人単位のユニットで共有スペースを利用した触れ合いが持てるようになっていく。

定員は、長期120名、ショートステイ20名の計140名となっている。

施設内には、聖堂も完備されている。写真。II。

第37回 聖霊による刷新

「貧しい者の友 イエスと共に」 東北大会

今回の東北大会は御受難修道会の島基幸(はたもとゆき)神父を講師として、10月24日・26日、茂庭荘で開かれました。



冒頭、島神父は、「聖霊による刷新は、福音の中心となることを恵みとしていただいた。このことをつかんでいなければ聖霊による刷新とは何かを人に伝えることができない。福音の中心である最後の晩餐でイエスが語られた『あなた方に新しい掟を与える。互いに愛し合いなさい』の理解は聖霊による刷新の本質を理解するのに役に立つ」と話されました。

第一講話

新しい掟の根幹をなす真福八端の「心の貧しい人々は幸い」と「あわれみ深い人々は幸い」は結びつ

いている。「神のあわれみは神の本質であり名称である。神は苦しむ者への同情から、腸がちぎれる思いを抱かれるのである」の説明は、苦しむ者への神の切なる御心に触れる思いがしました。

第二講話

「心の清い人々は幸い、その人たちは神を見る」は「神へのささげ物をする前に兄弟と和解する」という教えを通して私たちは浄められ、神を見ることができると話され、イエスが弟子の足を洗われた場面からの考察は、私の曇っていた目からまさにウロコが落ちる思いで、囚われの心から解放され

ました。「人の足を洗う」とは「相手の汚い面のあるところを受け止めて、相手を受け入れることである」と。

第三講話

新しい掟の新しいとは何か。「この新しさとは他者のために自分を与え尽くすという道徳的な高みにあるのではなく、イエスの霊である聖霊によってイエスの業ができる。私の力ではなく聖霊の賜物によって奉仕できる事の新しさである」と教えられました。また、「み言葉に触れることによって私たちは内から変えられていく」と。新しい掟の理解が大会テーマ「貧しい者の友 イエスと共に」へと結びついていきました。(北仙台教会 京野啓子)

神は愛なり(3)

滝田 十和男

キリスト教は「敵国の宗教」ということで、神父の療養所への出入りも何かと制約の多かった戦時中とは違い私が洗礼を受けたころは、だいたい制約が解かれ、小野神父様も魚が水を得たように、浪打から青森市新城までの汽車の便、または自転車12軒の道を走っておいでになり、布教に専念できるようになった。戦時中は療養の玄関先で聖体を授けていたのが、面会室も使えるようになった。

畳敷きでおよそ20畳ほどの面会室には、いつも50人からの聴衆が小野神父のお話を聴きに集まる盛況ぶりとなった。

そのころ丁度、期を同じくして私も若い仲間たちと患者自治会の旧体を打破して、新しい体制を作ろうと

その同じ仲間たちと呼びかけたのと、小野神父様の軽妙な対話ぶりに人気が集まり、時間の過ぎるのも忘れるほどで、その頃前後して結婚した妻の知子は、熱心な仏教信者であったが、改宗して洗礼を受けてくれたことが、私にとっては何よりの喜びであった。

先輩の大橋さん夫妻の人柄にも影響されて、その周囲の人々の受洗者が増え、患者自治会には、固有の宗教団体「カトリック研究会」として公認してもらい、大橋さんを会長にして組織化されたのは、昭和23年で、「丘の星」という謄写版刷りの会報を、毎月園内に配布したりして、教勢を高めていった。翌24年、青森県はカナダのケベック外国宣教会が担当することになり、邦人司祭の小野神父様は、宮城県のある教会へ移られたのである。(松丘教会委員長)

「聖体のエンカウンター」

10月31日から11月2日まで盛岡のシャルトル聖パウロ修道院第二修道院（黙想の家）で開催された「写真」。今回で3回目になる。

ご聖体のエンカウンターが開催されました。指導司祭のダナン神父は東京六本木のフランシスカンチャペルセンターからいらつしやいました。参加者の25名は静岡、東京、埼玉、仙台、青森、花巻、盛岡から集まりました。



ご聖体のエンカウンターは参加者一人ひとりが8つのみ言葉に対してご聖体に現存するイエス様の手紙を書き、そしてその手紙をご聖体の前で黙読します。それによってご聖体の中のイエス様との新たなエンカウンター（自己との出会いと発見）に導かれるというものです。

8つのみ言葉に対して神父の講話、参加者の体験の分かち合い、そしてご聖体のイエス様への手紙それからグループでの分かち合いの順で繰り返し行います。今回も参加者一人ひとりが人を通して働かれるイエス様と出会い、新たな自己との出会いをされ喜びのうちに

にそれぞれの場へと帰っていかれました。

ちなみに第一のみ言葉は「あなたたちはわたしを何者だと言うのか（マルコ8・29）」第二のみ言葉は（ヨハネ6・51）、第三は（マタイ26・26

―29）、第四（ルカ22・19）、第五（マタイ28・20）、第六（詩編118・24）、第七（ヨハネ6・51）、第八（マルコ16・15）です。私がご聖体のイエス様に語りかけると私の中に現存するイエス様が立ち上がってきます。それが信仰の神秘

なのだと思います。共に信じる仲間がいることの幸せを思います。来年11月にまたエンカウンターができるよう83歳のダナン神父の健康を祈りながらこの1年過ごしていきたいと思います。

（四ツ家教会 湯口 由紀子）

日本カトリック医療施設協会

50周年記念全国大会

50周年記念全国大会を終えて
10月31日から11月1日まで、標記の大会が仙台で開催された。

同協会50年の歩みを振り返り「カトリック医療施設の過去・現在と未来を見つめる」というテーマで、

全国のカトリック医療施設のうち22施設から140余名（当院参加者を含め190余名）が参加した。大会ミサで開幕し、まず幸田和生司教が「教会は野戦病院」と題した基調講演を行い、学びたいこととして、フランシスコ教皇の著書、使徒的勧告『福音の喜び』から以下を抜粋された。

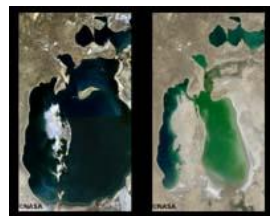
- ①（外に）出かけていき人々の現実に触れる教会
- ② だれもが宣教師で、「あなたが見つけたもの、あなたを生かすもの、あなたに希望を与えているもの」が伝えるべきこと
- ③ 神に委ねて信頼すること
- ④ 福音のメッセージの核心は「イエス・キリストはあなたを愛し、あなた



光ヶ丘スペルマン病院職員と役員

アラル海が消滅する

衛星写真によると、中央アジアにあるアラル海が消滅寸前とのことである。以前は世界で4番目に大きい湖（琵琶湖の100倍、東北6県の面積に相当）であり、漁業が盛んであった。かつての旧ソ連は「自然改造計画」を提唱し、アラル海に注ぐ2つの大河の流れを変えて、農業用地（主に綿花栽培）を広げた。1960年代からアラル海の縮小が始まり、2010年にはその面積が10%以下になった。



ウズベキスタンを旅行したときその付近を通過したが、塩で白く見える荒地が延々と続いたので驚いた。乾燥した湖底から舞い上がる塩を含んだ粉塵が周囲に広がったのだ。20世紀最大の環境破壊と言われるゆえんである。

農業生産を上げようとした自然改造計画は、豊かなアラル海とその付近を荒廃させ、その地の人々の生活を奪った。複雑かつ繊細な自然に対しての慎重な働きかけの重要性を示す教訓となっている。

地球を大事にする会 猪岡 光

たの救いのためにいのちをささげられた。キリストは今も生きておられ、日々あなたのそばであなたを照らし、力づけ、解放してくださる。そして「いかに苦しむ人に近づいていくかが私達に問われている」と話された。その後、各施設の研究発表に入り、設立時に委ねられた理念を、現代社会の中で実現していくうえでの課題や模索している姿、工夫や努力が発表された。

二日目の特別企画は「東日本大震災被災者と共に歩み続けて」と題し、八木山教会のボランティア活動の報告に続き、東北支援を継続されている神戸の精神科医小林和（かず）先生から「災害に学んだこと―支援を受けて、支援にかかわって―」と題して、講演をいただいた。派遣ミサで閉幕し、その後被災地視察と病院見学が行われ、盛会のうちに大会を無事終了した。今回の大会は当院が担当施設であり、職員にとつて大きな試練であったが、大会準備を通じて、各部署が垣根を越えて協力し合い、当院の基本理念に立ち返ることができたことは大きな意味があった。懇親会での職員有志による雀踊りも大好評で、ご協力いただいた関係皆様はこの場をお借りして、お礼申し上げます。

（光ヶ丘スペルマン病院

溝口 由美子

七五三の祝福

西仙台教会では、七五三の祝福を教会の子どもたちだけでなく、近くの角五郎亭にあるドミニコ学院幼稚園の園児たちにも呼びかけるようにしています。発端は、昨年小松神父さまより、「幼稚園は幼稚園として、神父さまを呼んで七五三のお祝いをしているが、それとは別に教会に行つて祝福を受け



たいという一般の保護者の方が必ずいらつしやるはずだ」との強い勧めがあった事に始まります。ドミニコ幼稚園園長の森本先生の所にご相談に伺つたところ、快く協力していただけるという事で、この案内を配布させていただきました。半信半疑でお待ちしていたところ、昨年は3家族の方々そして今年は2家族の方々申込み、わざわざ教会に足をこんで祝福を受けられました。いずれも、一般の未信者の家庭の方々であり、大変感激しております。写真は、今年の七五三の祝福（11月9日）の

ものです。一般の方々に、教会に足をこんでいただく良い機会ですので、今後も続けていきたいと思ひます。（上野 隆）

スヘルマン病院にクリスマス・イルミネーション

光が丘スヘルマン病院の患者さんたちや、地域の方々にクリスマスの光を届けたいと、12月6日（土）16時30分、イルミネーションが点灯した。点灯式では、會津陸司神父により樹木に飾られた電球に灌水し祝福。聖歌を歌い、カウントダウンに合わせて、子ども3人がスイッチを押すと、辺り一面にイルミネーションが点灯した。

これに先立ち、東仙台教会で「ちよつとお先にクリスマス」の集いがあり、落語やギター演奏に耳を傾けた。この催しは、仙台で活躍する市民団体「春風の家」（代表 小野敬子・一本杉教会が毎年の恒例行事として行っているもので、今年で9回目。



訃報

スール・マリ・マルト・デユ・サン・



テスフリ、OP.
大森 文子
ドミニコ会
ロザリオの聖母修道院

1917年6月6日生

1949年4月28日初誓願

1952年4月28日終生誓願修道

2014年11月4日 帰天 97歳

気仙沼出身で、お魚が大好きまた漬物に目がなく、漬物作りに精を出していました。明るく晴れやかで、よく私たちを喜ばせてくれました。

スール・マリ・ア・ロザリオ・ア・オ・ス・



中西 千代子
1930年10月17日生
1960年8月14日 聖ウルスラ修道会入会

1960年8月31日 初誓願

2014年10月14日 帰天 84歳

仙台と八戸のウルスラ高校で国語・宗教の教師。何事も真剣に取り組み、生徒へも愛情深く接していた。

スール・マリ・ア・テレジア・オ・ス・



村野井 キヨ
1930年6月8日生
1953年4月6日 聖ウルスラ修道会入会

1953年8月31日 初誓願

1959年8月31日 終生誓願

2014年11月17日 帰天 84歳

主に、仙台と八戸のウルスラ小学校の教師。子ども一人ひとりの関わりを大切に、夢や希望に向かえるよう育てていた。

新刊案内



ナツエラットの男

山浦玄嗣／発行 ぶねうま舎

／定価 2,300円＋税

本書は、第24回ドゥマゴ文学賞を受賞している。この賞は、先進性と独創性を受け継ぎ、既成の概念にとらわれることなく、常に新しい才能を認め、発掘に寄与したいと1990年に創設されたもの。選者の伊藤比呂美さんは、「不思議な読後感だった。完成されているかというところでもない。語りの力で読ませるかというともう一息である。むしろなんだかとても野暮りたい。だいたいとすら思う。でも魅力がある。無造作で、無鉄砲で、無頓着で、無邪気で、無垢で、無限で。わたしはやみくもに感動して、人に勧めた。勧めまくった。すごいですよ、こんなに

ださい小説はめったにありませんよ」と、選考の弁を述べている。福音書の中にあるいくつかのエピソードを素材に、短編小説に書き上げているが、読んでいるうちに2000年前のイエスが生きていた時代の風景、それぞれの場面にまるでタイムスリップしたように引き込まれる。登場人物の風貌や生き様も、さもありなんと思われるように描かれている。素材で純粋な、粗野だが魅力的な人物像は、緻細で神経質な現代の都会人とは対照的に野太い人間味にあふれている。

それぞれの短編は、必ずしもイエスが主人公ではないが、登場するイエスは、「垢染みで埃だらけの衣服の裾は擦り切れ、髪の毛はボサボサ、日に焼けた顔に目玉だけが輝いている。貧乏臭い割にはなかなかの男前だ」。これが正に著者が惚れ込んでいるイエスの姿なのか。

著者は「信仰の書ではない」と言うが、本書を読んで、聖書を読み直すと、目からうろこが落ちる。

編集後記

10月27・28日、中央協議会で、全国広報担当者会議が行われ、教区報の編集について学びました。講師の方から、ぜひ編集後記を入れるようご指導をいただきましたので、今回から編集後記を書くことにしました。

今号は、平賀司教様の「年頭書簡」を掲載しましたので、ぜひ熟読ください。今年1年間、仙台教区として大切にしていきたいという司教様の思いが書かれています。

今回の教区の皆様から寄せられた情報で紙面がいっぱいになっています。限られた紙面の中にどう入れたらよいか、編集部としてかなり苦労しましたが、皆様の教区報への関心が高いことに感謝。紙面の都合で、送っていただいた原稿に多少手を加え、一部を割愛するなどしました。ご容赦ください。

この一年、教区の皆様のご健康とご活躍を祈りながら、より一層充実した「教区報」となるよう努力していきたいと思ひます。（岩井）